

エボラ出血熱に対する対応を振り返って

2014年3月以降、西アフリカの3か国(ギニア、リベリア及びシエラレオネ)を中心にエボラ出血熱の流行が続きました。2015年5月6日付けの世界保健機関(WHO)の情報によると、発生した患者数は26,628人、死亡者数は11,020人になりました。過去にもコンゴ民主共和国やウガンダなどで流行したことはありましたが、感染者数は数百名程度で終息しています。しかし、今回の流行は世界的に大きな影響を与えています。アメリカやヨーロッパでは、流行地域でエボラウイルスに感染し帰国した患者や、その患者から病院内で感染した医療従事者が発生するなど、大変な騒動となりました。日本においても数名の疑似症患者が発生し、騒動においては例外ではありませんでした。

当院は、北海道で唯一の第一種感染症指定医療機関であり、一類感染症であるエボラ出血熱患者が発生した場合には、感染症病棟で患者を受け入れることになります。そこで、各部署から精鋭された37名のメンバー(医師5名、放射線技師2名、薬剤師2名、検査技師8名、臨床工学技士2名、医療事務2名、看護師16名)が選抜されました。患者を治療するに当たって、最も重要なことは、医療従事者の安全確保でした。医療従事者自身は、感染しないように防護レベルIVという特殊な防護具を適切に着脱できるようになることが必要でした。業務上、感染曝露の可能性がある職種が集まり、2014年11月から防護具着脱訓練を始め、2015年4月までに35回の訓練を開催しました。選抜されたメンバーには、感染症病棟という慣れない場所で、慣れない職員と、慣れない防護具を着用し、自分自身が感染するかもしれないという不安と、多大なるストレスを抱えながらの訓練となりました。また、防護具の着用は非常に暑く、勤務後の疲れた体にはきつ



採血訓練の様子

市立札幌病院
感染症内科 部長

永坂 敦



い訓練となりました。しかし、この期間中、多い職員では20回以上の訓練を実施し、ほとんどの選抜メンバーは問題なく防護具を着脱することができるようになりました。防護具を着用したままで、採血訓練(写真左下)、中心静脈挿入訓練、透析器械の動作確認、血液検査など、各職種が行う処置の訓練



中心静脈挿入訓練

も繰り返し行いました。また、患者搬入時に混乱することのないように札幌市保健所や千歳空港検疫所支所など、関連する院外の機関とシミュレーションや会議を行いました。このように、今回のエボラ出血熱患者の受け入れに対しては、病院職員のみならず、関連機関も一丸となって取り組みました。これらは、専門職の使命感なくしては出来ないことと思います。途中離脱することもなく、着々と訓練に励む選抜メンバーは、当院の誇れる医療チームと言っても過言ではありません。市立札幌病院の職員は、新たな感染症が発生した場合でも、今回の経験を活かし対応していけると思います。

日本では幸いなことに1名もエボラ出血熱患者が発生しませんが、今後も、感染管理推進室は、患者と職員に安全で質の高い感染防止対策を提供できるように支援していきたいと考えています。



検査技師が検体を取り扱っている様子